

コラム 緑化植物 ど・こ・ま・で・き・わ・め・る

アツバキミガヨラン (*Yucca gloriosa* L.)

半田俊彦 (志摩半島野生動物研究会) irowake@nyc.odn.ne.jp



アツバキミガヨランは高さ1~3mの常緑低木で、各地の公園や庭などに植栽されている。花が美しいことから主に観賞用として植えられているが、葉が堅く先端が剣状に尖っているため、侵入防止としても用いられる。北アメリカ南部原産で、日本には明治中期に移入された。日本のユッカ属には9種(品種を含む)が記載されているが³⁾、本種はその代表的なものであり、通称ユッカランとも呼ばれている。

春と秋の2回、長さ1mほどの円錐花序を直立させ、直径5~6cmの鐘形の花を下向きに咲かせる。春の花は白いが、秋に咲かせる花は赤みを帯びる傾向があるようだ。多数の花をつけるのだが、日本では人工授粉しない限り結実しないとされている。これは、ユッカ属の植物と相利共生関係にあり、唯一の花粉媒介者であるユッカガ類の蛾が、日本に生息していないためである⁴⁾。日本での繁殖は株分けや挿し木で行われており、非常に繁殖力が強いと容易に殖やすことができる⁶⁾。また、元来は半砂漠に生える植物であり、乾燥だけでなく寒さにも強いとされている。

三重県志摩市の沖合約2.5kmに浮かぶ和具大島は、ネコノシタやハマオモトなどが生育する海浜植物群落が発達しており、暖地性砂防植物群落として三重県の天然記念物に指定されている。通常は人の立ち入りが制限されており、人為的な影響を受けにくいと思われる無人島である。しかし、近年アツバキミガヨランが侵入し、海浜植物群落内の広い範囲にわたって繁茂している。大きく景観を損ねているだけでなく、在来種の存続の脅威となっていることから、地元自治体によって駆除作業が行われてきたが、地上部だけを除去する駆除方法では、かえって分布を広げる結果になっていた。そのため、2004年からは環境省グリーンワーカー事業によって、志摩半島野生動物研究会が根抜駆除に取り組んでいる。

2005年の駆除作業には、4日間で延べ100人近くが参加



左：アツバキミガヨランの根。上：駆除作業で取り残した根からの出芽。2ヶ月足らずでここまで成長した。

し、約6.9tを駆除した。しかし、そのほとんどが地中の根であり、面積にすると全体の1割程度しか駆除できていないと思われる。また、取り残した根も多くあり、そこからすぐに出芽するため、完全に駆除できるまでには相当な時間と労力を要するだろう。

アツバキミガヨランの根を掘ってみると、その太さに驚く人が多い。これはユッカ属が単子葉植物としては例外的に、2次肥大成長によって根の直径を増大させるためである⁵⁾。現在、駆除した植物体は志摩市の協力によって焼却処分しているが、大量に掘り出される根をもっと有効に利用できないものかと考えている。ユッカ属の植物にはサポニンが含まれていることが知られており、花や根の有用成分に関する研究は古くからされているが⁷⁾、良い利用方法をご存じの方はぜひご教示頂きたい。

和具大島では過去にアツバキミガヨランを植栽した記録はなく、本種が侵入した原因としては、近くの海岸で捨てられた植物体が漂着したか、堤防などの造成時に入れられた土に根が混入していた可能性が考えられる。現在のように大繁茂したのは、地上部を伐採したことによって多数の萌芽が発生し、横方向に分布を広げたためと思われるが、これがもともと一つの株から発生したのか、複数回にわたって島に侵入してきたのかについては不明である。これはDNA解析により調べられることだが、一方で日本のものは少数のクローンである可能性もあり、課題は多いと言える。また、本種が海岸に生育するのは和具大島だけではないため、各地における分布と生育状況を明らかにすることが、これらの課題を解明し、今後の被害を防ぐための一助になると考えている^{1,2)}。

引用文献

- 1) 半田俊彦 (2005) 志摩市の砂浜海岸におけるアツバキミガヨランの分布, 三重の生きものだより, 27: 4-6.
- 2) 半田俊彦 (2005) 渥美半島西の浜におけるアツバキミガヨランの分布, 三重の生きものだより, 28: 8-9.
- 3) 初島住彦 (1980) 日本の樹木, 講談社, pp. 778-779.
- 4) 広渡俊哉 (1998) ユッカガの生物学 (翻訳) 小蛾類の生物学, 文教出版, pp. 123-133.
- 5) 根の辞典編集委員会編 (1998) 根の辞典, 朝倉書店, pp. 36-37.
- 6) 桜井良三編 (1986) 決定版生物大図鑑園芸植物 I, 世界文化社, pp. 160.
- 7) 王旗宝・亀岡弘 (1977) アツバキミガヨランの花の精油成分について, 農化, 51(11): 649-653.



道路の街路樹として植えられている。ここでは地元の方が手入れをしており、花は風物詩になっている。



2000年に撮影した和具大島のアツバキミガヨラン。ここが天然記念物ではなかったら、アツバキミガヨランの花の名所になっていたかもしれない。



背が高く成長した古い株は、自重で折れてしまう。しかしそれで株が枯死することはなく、折れた幹からも新たな芽を出して生育する。



波などによって砂浜が浸食され、株ごと流出している。この砂浜ではアツバキミガヨランが植栽されているようだ。



波によって砂が流失し、根が露出している。太い根が絡み合っている様子がよく分かる。



掘り出された根の固まり。大きな株からは、四方八方に太い根が伸びている。



砂浜に散在するアツバキミガヨランの根。ここでは表層に根だけが存在しており、最近漂着したものではないかと思われた。



2tトラックに満載されたアツバキミガヨラン。離島からここまで運び出すだけでも大変だ。